

会 議 録

会 議 の 名 称	平成26年度第1回ひろさき教育創生市民会議
開 催 年 月 日	平成26年7月22日(火)
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後2時 から 午後4時 まで
開 催 場 所	中央公民館岩木館 大ホール(弘前市大字賀田一丁目18番地3)
座 長 の 氏 名	弘前大学教育担当理事・副学長 伊藤成治
出 席 者	<p>座長 伊藤 成治 委員 生島 美和 委員 関谷 道夫 委員 佐藤 文紀 委員 山形 明雄 委員 福嶋 等 委員 相内 英之 委員 山中 徹 委員 高橋 康雄 委員 前田 一隆 委員 虻川 士 委員 高山 洋子 委員 大湯 恵津子 委員 三上 美知子 委員 野村 太郎 委員 小田桐 慶二 委員 鶴谷 郁子 委員 村元 正彦 委員 久保杉 嘉衛 委員 増田 幸雄 委員 九戸 眞樹 委員 三浦 テツ 委員 濱野 麗 委員 境 江利子 委員 工藤 雅弘</p>
欠 席 者	<p>委員 河内 見地子 委員 滝本 壽史 委員 田村 瑞穂 委員 立石 眞樹 委員 桑村 弘昭 委員 梅村 博之 委員 笹 郁子</p>
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	<p>教育長 佐々木 健 教育部長 柴田 幸博 学校教育推進監 工藤 雅哉 教育政策課長 櫻庭 淳 学校企画課長 北嶋 郁也 学務健康課長 鳴海 誠 学校指導課長 佐藤 忠浩 生涯学習課長 土谷 伸夫 博物館長 長谷川 成一 文化財課長 三上 敏彦 弘前図書館主幹 柴田 弘毅 健康福祉部理事兼福祉事務所長 花田 昇 文化スポーツ振興課長 野呂 忠久 弘前市スポーツ少年団副本部長 工藤 朝臣</p>
会 議 の 議 題	「子どもたちの健全な育成のために必要な地域の関わり方とは」
会 議 結 果	<p>これまでの会議からも、テーマが異なっても委員から出されるキーワードは同じようなものがある。これらのキーワードについて一層深い議論を行うために、次回はグループ分けを行い討議することとする。</p>

<p>会議資料の名称</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・弘前市教育振興基本計画 ・平成26年度事業概要 ・討議テーマに関連する各課事業一覧
<p>会議内容 (発言者、発言内容、審議経過、結論等)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 座長挨拶 3. 委員紹介 4. 議事 <ul style="list-style-type: none"> ・弘前市教育振興基本計画に関する説明 ・討議テーマの設定に関する説明 ・全体討議 5. 事務連絡 6. 閉会 <p>【内容】 (概要)</p> <p>2. 座長挨拶</p> <p>伊藤座長より、「子どもたちを取り巻く環境が非常に複雑化している中において、健全にそしてたくましく生き抜く力をいかに身につけられるかが課題の一つとして挙げられる。この課題は家庭や学校の力だけで解決していくことは当然難しく、そこには地域の力が必要であるものとする。地域の関わりをいかにして有効に活用し、子どもたちの健全育成を図るかということについてそれぞれの経験などからより具体的なご提案をいただきたい。」という挨拶がありました。</p> <p>3. 委員紹介</p> <p>人事異動等により新たに委員となった出席者を紹介しました。</p> <p>弘前市連合父母と教師の会会長 山中 徹 委員 中南地域県民局地域健康福祉部子ども相談総室 総室長 久保杉 嘉衛 委員</p> <p>弘前市教育委員会委員長 九戸 眞樹 委員 弘前市少年教育指導員 濱野 麗 委員</p> <p>続いて、事務局側において異動となった職員を紹介しました。</p> <p>弘前市教育委員会 佐々木 健 教育長 弘前市教育委員会 柴田 幸博 教育部長</p>

4. 議事

弘前市教育振興基本計画及び今回の討議テーマについて、事務局側から簡単な説明が行われ、引き続き座長の進行のもと討議が行われました。

(座長)

討議テーマに関連した取組を行っている委員から発言をお願いします。

(委員)

地域と学校と保護者が一体となって、いろいろと対応しているとともに、その方向性の追求を行っている。このことについては地域から異論や反論はない。

学校長が相談しやすい地域の体制作りとして、地域の中にコミュニティー会議を設置するとともに代表を決め、学校長は保護者に相談しながら何かを進めればよいと考える。ただし、このようなことを発言すると、事務局を公民館に押し付けられる嫌いがある。

(委員)

学校の子ども安全ボランティアというグループがあるが、ボランティア活動のために声掛けを行うと、PTA役員しか集まらず、他の保護者の参加が少ない。

また、活動の際子どもたちに何かあると、地域の役員は何を見ていたんだ、などと批判ばかりする。これではボランティア活動に参加する人は少なくなる。

地域で一生懸命子どもを守ろうとしても、地域の大人が参加しないことには子どもたちを守ることができない。自分の子どもを見守るように、他人の子どもを見守ってほしい。

(委員)

本校では町会長や民生委員、保護者にも参加してもらい、会議の機会を設けているものの、若い世代となると難しい。

PTAに関する集まりでは参加者が減少傾向にある。自分の子どもには関心があるが、みんなで子どもを育てていこうという意識が希薄と感じる。

まずは親を啓発していかないと、何かあるとすぐに親と学校が対立関係になってしまう。

(委員)

学校の呼びかけに対して協力的に集まってくれる人が多くいる一方、若い方の参加がほとんどない。

子どもたちを地域で育てていくという意識はやや弱いように感じる。

地域住民にB i・B iっとスペースへ関わってほしいというが、難しいと思う。昨年度からの実績なども紹介しながら話し合いを深めればよいのではないか。

(座長)

行政側は多くの地域住民に関わってもらうための手法について苦慮しているようである。多くの地域住民に関わってもらえる仕掛けのようなものについて考えがあれば伺いたい。

(委員)

昔と違って学校に馴染みがなくなった。行事等の誘いが無いわけではないが、行きにくくなったような気がする。

(委員)

B i・B iっとスペースの地域の見守りに関わっている。今は関わる地域住民は少ないが、時間をかけて種をまいたおかげで地域のお母さんが関心を持ってきている。

関わっている先輩お母さんが、若いお母さん方に手を差し伸べたり、少し声をかけたりすると来てくれるのではないかという気持ちを持っている。もう少し長い目で見てほしい。

(委員)

年配の方は結構集まりやすいようなので、若い親も連携できるようなイベントを企画してはどうか。

(委員)

学校との間に入るクッションとして地域が必要なのではないか。

学校側ももう少し地域に対して気楽に物事を言ってほしいと思う。

B i・B iっとスペースについては、もう少し時間をかけながら行く必要があるのではないかと思う。関わってくれる地域住民については、まずはどんなことをしているのか気軽に顔を出すだけでもいい。

(委員)

学校現場はきれいごとではないと感じた。

農村部の学校は地域と密接であり、地域の存続と学校の存続がイコールである。一方、市街地では人数が多く個性が豊かということもあるのか、無関心な親もいるということもあり、一緒の方向になかなか向かえないことが見て取れる。

学校の管理面の厳しさについては、様々なニュースからも仕方のないことと思う半面、地域としてどうやって防いでいけるか。地域の目を育てるという意味ではもう少し自由に学校と地域が自由に行き来できるシステムを作る必要がある。

(委員)

若い親の参加が少ない点について、参加できる環境が整っているかどうか吟味が必要。

学校の管理については、予防することの重要性について啓発を図っていくことが必要。

(委員)

支援が必要な家庭では、相談したくてもどこに相談したらよいか分からなかったり、子どもをどうやって育てていけばいいかわからなかったりして、結局誰にも相談できずに虐待につながってしまう事例もある。

家庭が出しているSOSを行政だけで救い上げるのは難しい。やはり地域の力が必要。

地域の人が自分の子どもだけではなく、隣近所の子どものも含めて育てていくといった気持ちを持つことが必要。

(委員)

地域の関わりについての道筋や手順についての難しさを感じているが、地道に種をまく作業は必要であると感じる。

(委員)

昨年度第2回目の会議においてはグループに分かれて話し合った。今回のように全体会において自分たちの行っている取組を話すだけではなく、分野を限定して意見が欲しいと感じる。

(委員)

地元行事において子どもたちを集めることに苦勞している。学校側も地域の行事に子どもたちが出やすいように仕向けていく考え方が必要なのではないか。

地域活動を実施するにしても、スポーツ少年団の活動日程を学校が把握しておけばいいのではないか。

(委員)

学校と地域が離れていっている状況なのではないか。学校現場が近寄りたがたいものになっている。

このような状況に変化を加え好転させるためには子どもたちが地域に出ていき、地域の大人との交流の中から社会の仕組みや礼節を学ぶ機会を作り、学校現場と地域の開きを埋める必要がある。

(委員)

忙しくても子どものことに関わろうと思えばできるのだが、今の若い人は関わらない。

今の人にボランティアの気持ちを育てたいと思う。そのためにボランティアポイントというものを考えている。良いことをすることを恥ずかしがらない世界になってくれればと思う。

(委員)

二言目には「今の親は・・・」という人がいるが、今の親を育てたのは私たち世代であるということを言っている。

三世代家族が減少し核家族が多くなっている中で、民生委員としては私たちが相談に乗って親を育てましょうという考えでいる。

子どもの数が減少し町会での行事が難しくなっているので、学区のみ
んで計画し学校を通して参加を呼び掛けている。

もっと学校を利用して、学校に協力を仰いで地域が計画を立ててもいい
のではないか。

(委員)

小学校からはともかく、中学校になると学校の新聞は来るものの、学校
でどうしているのか全然わからない。

不審者情報について学区外でのものであってもメール発信してほしい。
子どもたちは(学区を越えて)どこにでも行くのだから情報がないと注意
しようにもできない。

(委員)

P T Aで役員を決めようとしても少ない出席者の中から決めなくては
いけない。P T Aの親も当然地域住民なので啓発が必要。

(委員)

世の中が変わり、生活スタイルが変わり、親の考え方が変わっても、子
どもたちは今も昔も子どもは子どもで変わらない。

(委員)

社会と子どもをつなぐ事業を行っている。このことについて、常々私か
ら提案させてもらっているし、学校側から提案があれば受け入れる。学校
側からのアクションが欲しいと思う。

この場では何も決まらない。ぜひワーキンググループを作って話し合
い、施策におとして行ってほしい。

(委員)

学生を見ていると、社会活動や集団に属しての活動に対して抵抗感があ
るよう見受けられるが、若い世代だけではなく、中高年でも同じような
傾向がある。これは、社会全体がそういうことに対する熱意やモチベー
ションが低下しているためではないか。

一方、自分の興味のあるものや得意なものについては取組むような
ので、ここをどのように結び付けるかが大事なのではないか。

(委員)

教育施策の中で、子どもの教育に対するものは非常に多いが、大人の学
びの部分が少ない。

若い親も20年経つと若くない。その人たちが地域を担っていく時代が
怖く感じる。社会を担う人をどのようにつくるかということについて大き
な課題として取組んでいかななくてはならない。

地域の人にどのように関わってもらうかについては、一般の参加者とし
て来てもらうのではなく、事業作りから一緒にやってもらう。このプロセ
スが仕掛けになるのではないか。既存の事業をより大人も巻き込んでいく

ような仕掛けを作っていけるのではないか。

(座長)

何か結論を出すという会議ではないが、何かに結び付けていかななくては
いけない。そのためにもう一步踏み込んだ議論をしてみたい。

次回の会議ではグループに分かれて議論してみたい。

これまでに委員の皆さんから出された意見から

1 「大人の教育はどうあるべきか」

子どもたちの教育を考えるためにこのように集まっているものの、まずは
大人の教育なのではないか。

教育をキーワードとした際の大人の社会をどう作っていくか。

2 「学校とは」

学校の管理の厳しさ。何をもって管理を言うのか、何をもって地域のつ
ながりと称するのか。

3 「教育課程外の教育」

B i ・ B i っとスペースやスポーツ少年団。ねふたまつりなど学校外の
教育についても議論が必要だろう。

大きく3点にまとめてみたが、他に視点などあるか

(委員)

制度的な問題があるかもしれないが、お母さん方が優先的に参観日で休
暇を取ることができるよう、参観日休暇制度のようなものを創設できない
か。

公民館や市教委の行事において、世代別の行事や講座はあるものの、世
代をミックスしたものが少ないように感じるので、そのような機会を設け
てほしい。

(座長)

後半部分は教育課程外にまとめさせてもらうが、前半の制度の部分につ
いてはこれも一つのテーマとなる。

(委員)

市町村の実態や課題を整理したうえで、たまには教育委員会から対応策
も出してもらいたい。

(座長)

教育委員会には論点整理をしてもらい、たたき台は作ってもらわないと
いけない。

テーマはいくつになるかわからないが、横串（課室横断）は刺さないと
いけないだろう。

(委員)

地域になくてはならない人材が東京に流出すると税収が減ることもあ
るだろう。地元で経済活動してほしい。

職業体験を受け入れた企業に対しては銀行の融資を受けやすくするなどの特典があればいい。

(座長)

次回にはもう一步施策に近づくような議論をさせていただきたいので、教育委員会には論点整理及び細かくなくていいのでたたき台を作ってほしい。

(委員)

グループに関して、事前にアンケートを取ってもらえばいい。

(委員)

今日の話し合いの中で、学校からの働き掛け、アクションが少ないという話があり驚いた。開かれた学校をめざし情報提供しているつもりである。

地域行事への子どもたちの参加については、学校側から声掛けやチラシ配布も行っている。地域行事への参加が少ないのは、部活動やスポ少、親子で過ごすなどの理由からだろう。

学校に対して多くの要望があるだろうが、お互いに話し合いをしながら出来ることを探っていくしかないのではないかと。